下町文化
NO. 256
2012.1.19

発　行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

「見て・聞いて・学ぶ」

古写真・職人・近代俳句の世界

芭蕉の書簡（写）も

◀漱石筆「白菊と」句幅

昭和30年頃の亀戸駅北口付近

伝統工芸展（指物）

○見て・聞いて・学ぶ
古写真・職人・近代俳句の世界
○江東古写真展（深川東京モダン館）
－昭和の想い出、平成の風景－
○江東区伝統工芸展（深川江戸資料館）
○「近代の俳人」展（芭蕉記念館）
○城東の村を歩く②
小名木村
○「銅造水盤　太田正義作」からみる
富岡八幡宮信仰の広がり
○『鋳銭座遺跡考』にみえる
亀戸銭座出土の遺物

歴史と文化財の

展示・実演を見に行こう

新たな年を迎え、文化財係と芭蕉記念館で実施する３つの展示をご案内します。

まず、文化財係による２つの展示です。ひとつは、１月18日（水）から29日（日）まで、深川東京モダン館で開催する「江東古写真展」です。内容は、昭和30年頃の古写真と現在の写真を並べ、展示します。ただ〝なつかしむ〟だけでなく、古写真のなかに広がる当時の「世界」をお楽しみください。次は、２月24日（金）から26日（日）までの３日間、深川江戸資料館で開催する「江東区伝統工芸展」です。区内には、江東区無形文化財保持者に認定されている、多くの職人さんが住んでいます。日頃見ることのできない伝統の技を、実演や展示作品を通してご覧ください。体験もできますので、どうぞ飛び入りで「弟子入り」してみてください。最後は、芭蕉記念館で、現在開催されている企画展「近代の俳人」展で、芭蕉が門人にあてた「呂丸宛芭蕉書簡（写）」も初公開しています。

年明けの寒い季節ですが、この機会にぜひ、お立ち寄りください。

詳細は、次頁以降をご覧ください。

江東古写真展 ―昭和の想い出、平成の風景―

古写真は、昔の様子をビジュアルに知ることができる貴重な資料のひとつです。文化財係では、これまでに多くの古写真を収集してきました。その一部は、平成3年刊行の『思いDE写真館』や平成16年刊行の『江東古写真館』に収録されています。また、この「下町文化」紙上でも、「こうとう今昔」のコーナーで折々に紹介をしてきました。

平成19年からは、文化財保護推進協力員の有志を中心とした古写真整理プロジェクトを立ち上げ、文化財係で収集した古写真の整理作業にご協力をいただいてきました。そのおかげで、整理作業も一段落がつきました。

そこで、次のステップとして、収集した古写真の展示・公開をすすめていきます。その第一歩が、今回開催する「江東古写真展―昭和の想い出、平成の風景―」です。今回は、江東区が大きな変化をとげた昭和30年代～40年代の古写真を中心に展示します。

展示する古写真はプロジェクトメンバーの選定によるもので、撮影場所の特定や説明文なども、すべてメンバーのみなさんによるものです。古写真の撮影地点を示した地図や、同じ場所を撮影した現在の写真も展示します。ご覧いただければ過去と現在の移り変わりが一目でわかることでしょう。

今回の展示には、もう一つ狙いがあります。それは、今回の展示をきっかけとして、区内に埋もれている古写真をさらに発掘することです。昨年8月11日号の区報で展示用古写真を募集したところ、これまでに予想以上のご提供をいただきました。江東古写真展では、こうした区民の方々からご提供いただきました貴重な古写真も展示します。

古写真は、当時の様子を知る方には懐かしく見え、新たに区民となった方には新鮮に映るのではないでしょうか。懐かしくも新しい、約半世紀前の江東区の姿を是非ご覧ください。

期　間　平成24年1月18日（水）～1月29日（日）

会　場　深川東京モダン館（門前仲町1―19―15）

※本展示は深川東京モダン館との共催です。モダン館の開館時間は10時～18時、入場は無料です。

※1月23日は月曜日のため休館です。

（文化財専門員　中西崇）

下の古写真は、今のどこの場所を撮影したものでしょうか？（答えは会場にて）

入場無料

江東区伝統工芸展

日時　平成24年2月24日(金)～26日(日)
午前9時30分～午後5時

会場　深川江戸資料館
地階レクホール
(江東区白河1－3－28)

江東区は、江戸東京の消費を支える商工業の町として発展してきました。日本橋の問屋街に近く、また木場や縦横に走る水路といった環境にめぐまれ、生活に密着した品を作る職人が多くおり、今日もたくさんの職人がその腕を振るっています。江東区教育委員会では、伝統工芸の技を受け継ぐ方を無形文化財保持者として認定してきました。認定件数は現在46件です。

本展は、伝統工芸品の展示のほか、区無形文化財保持者による実演も行います(日程表参照)。長年の修業によって得た技をご覧ください。また体験が可能なものもあります。

本展を通して、その道一筋に精進してきた職人の世界に触れていただきたいと思います。

＊　＊　＊

◆伝統工芸品即売(会期中)

会場内で、江東区伝統工芸保存会による伝統工芸品の即売が行われます。

実演公開

午前10時から午後4時まで
(適宜休憩を取ります)

日程については、右記の表をご覧ください。なお、都合により変更する場合もありますので、ご了承ください。

技の体験(実費がかかります)

①午前10時から正午まで
②午後1時から3時まで

実演日程表のうち、　の技術で体験ができます。申込は会場で直接職人さんに申し出てください。

実演日程表

	技術	保持者
2/24(金)	木工(彫刻)	渡邉美憲
	木工(建具)	友國三郎
	木工(指物)	山田一彦
	木工(襖framed・縁)	鈴木延坦
	金工(刀剣研磨)	臼木良彦
	相撲呼び出し裁着袴製作	富永 皓
	染織(更紗染)	佐野利夫・佐野勇二
	染織(紋章上絵)	石合信也
	あめ細工	青木 喜
2/25(土)	庖丁製作	吉澤 操
	木工(建具)	友國三郎
	木工(指物)	山田一彦
	表具	岩崎清二・岩崎 晃
	染織(更紗染)	佐野利夫・佐野勇二
	染織(無地染)	近藤良治
	手描友禅	和田宣明
	染色補正	丸田常廣
	簾製作	豊田 勇
	あめ細工	青木 喜
2/26(日)	木工(彫刻)	岸本忠雄
	木工(指物)	山田一彦
	木工(襖framed・縁)	鈴木延坦
	金工(刀剣研磨)	臼木良彦
	ガラス工(江戸切子)	須田富雄
	ガラス工(江戸切子)	小林淑郎
	簾製作	豊田 勇
	染織(更紗染)	佐野利夫・佐野勇二
	染織(紋章上絵)	亀山晴男
	あめ細工	青木 喜

※　　は技の体験です。　　(順不同・敬称略)

深川江戸資料館 ー案内図ー

交　通

- ●都営地下鉄大江戸線「清澄白河」駅下車A3出口徒歩3分
- ●東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅下車A3出口徒歩3分
- ●都バス門33「清澄庭園前」下車徒歩3分
- ●都バス秋26「清澄白河駅」下車徒歩4分

平成23年度芭蕉記念館企画展

「近代の俳人」展と「呂丸宛芭蕉書簡（写）」初公開

平成24年4月22日（日）まで

芭蕉記念館では、企画展「近代の俳人」展を開催しています。また、芭蕉が元禄5年2月8日付に門人の近藤左吉（呂丸）に宛てた写しの書簡一幅を初公開。

明治期の俳諧は、江戸時代以来の旧派の俳人と中期の正岡子規の登場によって、その流れが大きく分岐することになります。

展示の明治24年（1891）の「東京俳諧　宗匠一覧」には、旧派の俳人が「大家」「高名家」「名家」や「席位前後甲乙論ぜず」などとして、当時一流の俳人が名を連ねています。深川では、「高名家」欄に「不白軒梅年」、「甲乙不論」欄には、「田喜庵詩竹」「夜継庵得之」「太山亭蓮舟」「震柳居春喬」「竹立庵晋江」「鳥歌園花朝」の俳人の名が見えます。この時期の東京の俳人を知ることが出来る貴重なものです。そして、当時、名を馳せた旧派の永機・芹舎・聴秋などの俳人の作品が並びます。

「東京俳諧宗匠一覧」

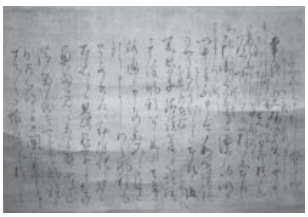
一方、近代俳句の黎明期を支えた正岡子規を筆頭に、夏目漱石、「秋声会」の尾崎紅葉や巌谷小波、「筑波会」の沼波瓊音、「日本派」の内藤鳴雪・高浜虚子、「新傾向運動」の河東碧梧桐など、多彩な面々が展示に顔を揃えています。これらの俳人の遺墨に触れることで、現代に至る俳句の原点を感じ取ることが出来ます。

＊

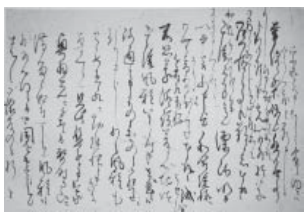
芭蕉の書簡は、『芭蕉全図譜』（平成5年　岩波書店）によって、140点ほどが明らかにされました。それ以降、写しも含め、今日まで何点かの新たな書簡が発見されています。

さて、今回展示する芭蕉書簡は、元禄5年2月8日付の書簡の写しです。真蹟は、現在、山形の出羽三山歴史博物館に蔵されています（書簡の寸法23・7cm×37・1cm）。

内容は、「奥羽行脚に出立する門人支考（盤子）に持たせた紹介状である。『おくのほそ道』の旅の折に世話になった礼、その翌年に門人路通が世話になった礼を述べ、これから奥羽に下向する支考を紹介する。（中略）宗吾は曾良のこと。」などとあります（『芭蕉全図譜』）。



呂丸宛芭蕉書簡写し



参考　呂丸宛芭蕉書簡
（芭蕉全図譜より）

本掛軸の寸法は169・5cm×54・5cmで、上段に芭蕉書簡写（26・3cm×37・cm）、下段に千代銘正月発句懐紙（28・1cm×45・1cm）の二点が貼り込まれた合装ですが、いずれも真蹟とは言えません。

芭蕉書簡写しに注目してみると、真蹟書簡の本紙は上下の余白部分が文字ギリギリに裁断され、寸法が23・7cmであり、写し書簡は本紙が26・3cmと上下の余白に余裕があります。ただ、真蹟書簡の文字ギリギリの寸法で写し書簡を計測してみると、同じ23・7cmとなります。さらに本紙左右の裁断の仕方は真蹟書簡と写し書簡とでは、後者が4ミリの余裕があります。これは、真蹟書簡自体を掛軸に装丁し直す際に裁断処理したものと理解でき、本来は写し書簡並みの本紙の寸法だった可能性があります。

手紙は、「冒頭の二行は、文末で紙幅が尽きたため折り返して記したもの。」（『芭蕉全図譜』）とされ、本文が18行、追伸（尚々書）が19行目～22行目、23行目が日付、そして24行目が差し出しと宛所となり、文字の位置や高さ、行間の使い方が正確に写し取られています。相違する点は一箇所、真蹟書簡の本文9行目の下にある「御懇意ニ」の部分が、写し書簡では「ニ」を書き落としています。また、本文6行目の最初の文字を芭蕉が書き違いが見られますが、写し書簡はこれを見せ消ちとせず、正しく「不」として書いていることです。全体は、写し書簡の方が芭蕉の字よりも柔らかい筆致で書かれています。この掛軸の来歴は、同じ山形県内にあったもので、真蹟書簡を前に忠実に写し取った、貴重な資料と言えるでしょう。

この機会に是非、記念館にお立ち寄りください。

（横浜文孝）

芭蕉記念館　問合せ

江東区芭蕉記念館
江東区常盤1−6−3
☎03(3631)1448

城東の村を歩く②

小名木村

小名木村の開発

天正18年（1590）の徳川家康の江戸入部によって開発が始まった城東地区のなかでも、特に歴史が古いとされるのが、小名木川の中川口の北側に位置した小名木村（大島8・9丁目付近）です。小名木村は、天正年間に小名木四郎兵衛という人物によって開発されたといわれ、村名も開発者である四郎兵衛の姓に由来しています。

ただし、小名木村で初めて検地（土地の測量調査）が行われたのは、元禄10年（1697）のことです。村の石高（生産力を米の量で換算した値）は139石余で、明治初年には160石余に増えています。また、村が地図上に現れてくるのも、「元禄国絵図」以降のこととなります。

小名木川の開削

小名木四郎兵衛は、江戸時代の地誌『新編武蔵風土記』や『葛西志』の記述をみると、徳川家康の命により、行徳（市川市）から江戸への舟運を確保するため、慶長年間（1596～1615）に小名木川（区登録史跡）の開削も行なったとされます。そのため『新編武蔵風土記』では、川の名称は四郎兵衛に由来するとしています。

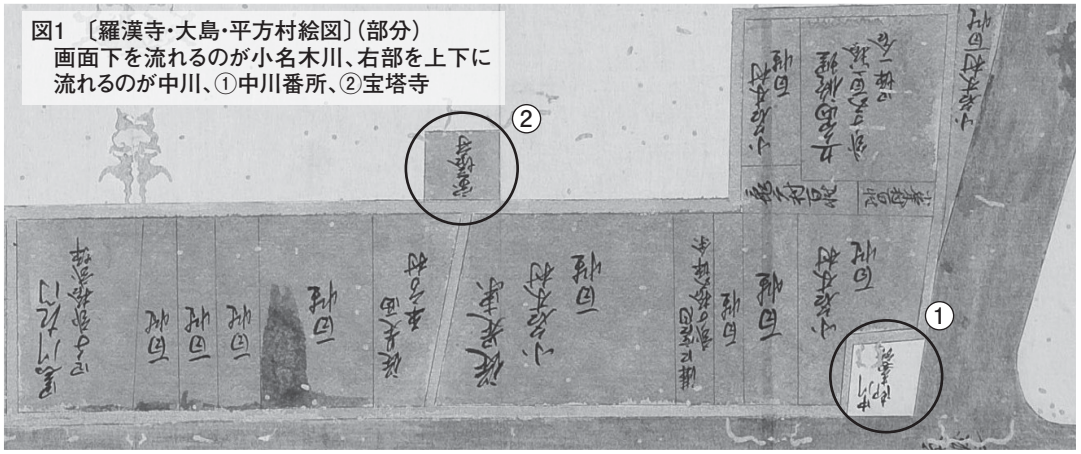


図1〔羅漢寺・大島・平方村絵図〕（部分）
画面下を流れるのが小名木川、右部を上下に流れるのが中川、①中川番所、②宝塔寺

しかし、「小名木川」という名称がはっきりと文献上に出てくるのは享保年間（1716～1736）以降のことです。それ以前の文献では、「ウナギサヤホリ」（『正保国絵図』）、「うなぎ沢」（「増補江戸大絵図」延宝7年）などとあり、『江戸砂子温故名跡誌』（享保17年）では「小名木川」の頃に、「俗にうなぎさわと云」と記されています。おそらく、当初は「うなぎさわ」という名称が一般的で、次第に「小名木川」と呼ばれるようになったのだと思われます。

中川番所と宝塔寺

小名木村に沿って流れる小名木川は、開削当時から行徳との舟運を繋ぐ役割を担っていたといわれるように、江戸時代、舟路による流通・交通の動脈として機能しました。

関東や東北の各地から利根川・江戸川を下ってきた物資は、江東区内の水路を通って隅田川・江戸へと運び込まれました。なかでも重要な役割を果たしたのが小名木川で、江戸の出入口を警備するために船番所も設置されました。当初は隅田川口の万年橋北側に「深川番所」（区登録史跡「川船番所跡」常盤1―1付近）が設置され、江戸に出入りする舟を取り締りました。

しかし、明暦3年（1657）の江戸大火以降、深川地域が町場として発展し、同時に水路開削も活発化していくなかで、江戸の周辺部が拡大していきました。そして、寛文元年（1661）には番所も、小名木村東部の中川口へ移転して「中川番所」（区指定史跡「中川船番所跡」大島9―1）となりました。そして番所では、夜間通船のチェックや女性の通行、鉄砲などの武具の取り締まりのほか、積み荷の検査も行うようになり、商品流通の把握などの役割も担いました。

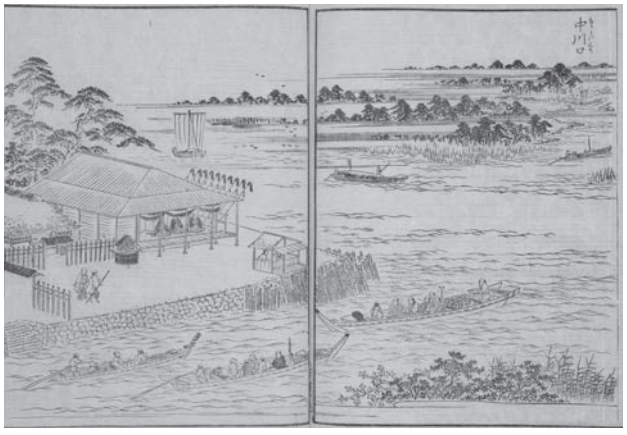


図2　『江戸名所図会』「中川口」　中川番所が描かれる

また、村内には真言宗寺院の稲荷山宝塔寺（大島8―38―32）がありました。現在、寺内に安置されている塩なめ地蔵（区登録有形民俗文化財、別名いぼ取地蔵）は、もとは小名木川沿いにあったもので、川を通行する人々の信仰を集め、商売繁盛やいぼ治療にご利益があるといわれています。

（文化財専門員　斉藤照徳）

「銅造水盤 太田正義作」からみる 富岡八幡宮信仰の広がり

富岡八幡宮の水屋には、大きな水盤が置かれています。ご覧になったり、実際に利用されたりした方も少なくないかと思います。この水盤は、実は今から２００年以上前の享和３年（１８０３）に作られたものです。関東大震災や東京大空襲などをくぐり抜け、今なお参詣者に利用されているのです。

作者は、代々太田駿河守藤原正義（まさよし）（「政義」「政儀」「政吉」）を名乗っている、神田の鋳物師（いもじ）太田正義です。太田正義は江戸の鋳物師として有名だったようで、霊巌寺などにある江戸六地蔵も鋳造しています（ただし、江戸六地蔵が鋳造されたのは１７０８年から１７２０年にかけてですので、作者は、富岡八幡宮の水盤を作った太田正義の何代か前の人物でしょう）。

水盤全景写真

この水盤も、一工夫された作りとなっています。一見すると青銅製に見えますが、実は石製の水盤を青銅で包んだ構造になっています。また、外からは見えにくいですが、雲をあしらった巧みな鋳物の脚が４つ付けられています。江戸の鋳物師が作ったこれだけ立派な水盤が現存している事例は珍しく、工芸品として歴史的な価値を持っているといえます。

水盤の脚

では、この水盤の注文主は誰でしょうか。答えは水盤にあります。水盤には、正面に29件、左側面に１３０件、右側面に１３１件、合計２９０件もの奉納者などの名前が刻まれており、たいへん多くの人々が、この水盤の奉納に参加していたことがわかります。

そこで、彼らがどのような人たちだったのか考えてみましょう。奉納者名は、「中嶋屋太兵衛」や「銅屋半右衛門」など、屋号がついた、商人とみられる名前がほとんどです。一部、「出見世」や「長家中」などと記されている例もありますが、基本的には商人たちが力を合わせて水盤を奉納したとみて間違いないでしょう。そして、水盤の正面に名前が刻まれている世話人５名、願主３名、奉納者21名が、この水盤の奉納に中心的な役割を果たした人々と考えられます。ただし興味深いことに、このうちの約3分の2は、現江東区域の人々でも、深川八幡宮の氏子町の人々でもありません。水盤の奉納者全体をみても、約半数は深川八幡宮の氏子町ではない町の人々です（表1）。

水盤正面に刻まれた奉納者名

大門通	中嶋屋太兵衛
	銅屋半右衛門
	銅屋富五郎
	中嶋屋金八
	銅屋惣兵衛
	銅屋吉次郎
	中嶋屋源次郎
	銅屋藤右衛門
	銅屋宇兵衛
	銅屋亥三郎
	中嶋屋徳兵衛
	野田屋伊三郎
	銅屋定七
	銅屋嘉七
	銅屋市兵衛
	紀伊國屋半七
立川	河内屋長次郎
柳橋	河内屋長七
箱崎	釘屋定次郎
室町	銅屋惣次郎
	鉄屋八右衛門
世話人	
大門通	伊勢屋長兵衛
	銅屋徳兵衛
	中嶋屋源七
黒江丁	白木屋八郎兵衛
御門前	近江屋藤兵衛
願主	
北川町	伊豫屋庄左ヱ門
	伊豫屋平八
大門通	銅屋安兵衛

深川八幡宮の門前町や氏子町であれば黒く塗りつぶし、氏子町でなければ黒線で囲って白抜きにしたものが左頁の地図です（明治12年内務省地理局誌課作成「実測東京全図」をもとに作図しました）。これを見ると、大川（隅田川）の対岸の馬喰町や日本橋、神田、銀座あたりからも水盤の奉納に参加していることがわかります。なお、同図には、縮尺の関係で八官丁（現中央区銀座８丁目）と四ッ谷伝大門通（おおもんどおり）沿いの商人たちで、水盤の正面にも17名の名が刻まれています。

さて、奉納者が住んでいる町を、深川

馬町（現新宿区四谷1～3丁目）は含まれていません。

次に、奉納者の職種をみてみたいと思います。奉納者の職種を調べてまとめたものが表2です。

残念ながら職種不明の商人も少なくないですが、判明する中で最も多い職種が、鉄や銅、釘を扱う釘鉄銅物問屋の商人たちで、47名が確認できました。水盤は青銅製ですので、彼らは水盤の材料を提供した可能性も考えられます。あとは炭薪仲買商人や岡場所関係の奉納者が9名と比較的多いものの、さまざまな職種から水盤奉納に参加していることがわかります。

御弓師がいるのは、富岡八幡宮の近くに三十三間堂があったことによるのでしょうか。「立川」（竪川）沿いの商人が比較的目立つのは、竪川講という、火除（ひよけ）（火災防止）の霊験あらたかな三峰神社（埼玉県秩父市）を信仰する人々の講のメンバーが、この水盤奉納にもまとまって参加していたからかもしれません。

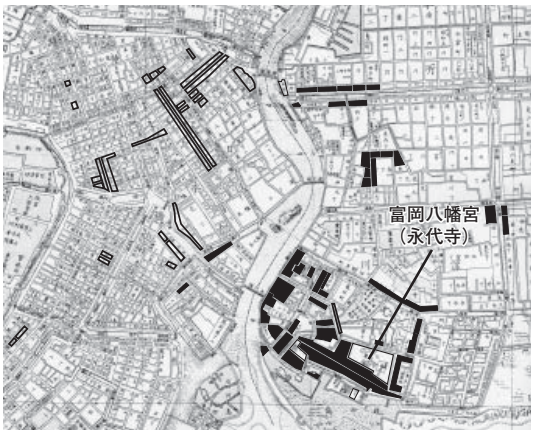
しかし、いずれにしても、富岡八幡宮の門前町や氏子町ではない町の、しかもさまざまな職種の商人たちが参加していたといえます。富岡八幡宮が、江戸の商人たちから幅広く信仰を集めていたことが、この水盤の刻銘から見て取れます。

とはいえ、江戸の商人たちの活動については、まだまだわからないことがたくさんあります。水盤に名前が刻まれている商人の半分以上が、職種などがわかっていません。江戸の商人たちについて調べていく上でも、本水盤の刻銘は貴重な資料といえます。

このような多様な価値をもった水盤は、江東区にとってとりわけ重要な文化財であるということで、平成23年4月に区指定有形文化財（工芸品）となりました。

これからも、富岡八幡宮の水盤として参詣者に利用されながら、後世まで大切に伝えられていくことを願います。

（文化財専門員　中西崇）



銅造水盤奉納者居住地地図

表2　銅造水盤奉納者職種一覧

職種	人数
釘鉄銅物問屋	47
炭薪仲買	9
岡場所	9
米穀問屋	3
打物問屋	2
材木問屋　熊野問屋組合	2
材木仲買	2
材木竹炭問屋	2
水油問屋	2
瀬戸物店組	2
御弓師	2
古方・釘店組	1
銅鎖鍼物数品	1
石灰蠣殻灰俵売仲買	1
革烟草入問屋	1
烟管問屋	1
廻船問屋	1
書物問屋	1
鮮塩干肴問屋	1
生布海苔苧屑苅仲間	1
本町薬種問屋	1
御琴三味線所	1
紺屋小紋形所	1
扇問屋	1
鼈甲櫛笄簪所	1
六組飛脚屋	1
砂糖問屋	1
川魚	1
蕎麦	1
両替	1
銭屋商組	1
不明	188
（合計）	290

表1　銅造水盤奉納者居住地一覧

町名	関係	人数	現在の住所
御門前（永代寺門前町）	門前町	26	江東区富岡1
仲町（永代寺門前仲町）	門前町	18	江東区富岡1、門前仲町1・2
土橋（門前仲町町内表通り）	門前町	4	江東区富岡1～3
東仲町（永代寺門前東仲町）	門前町	1	江東区富岡1・2
御舟蔵前	氏子町	1	江東区新大橋2
森下町	氏子町	2	江東区森下1～3
扇橋町	氏子町	1	江東区白河4、三好4、平野4、扇橋1
大和町	氏子町	1	江東区冬木
富岡町	氏子町	7	江東区冬木・深川2
平野町	氏子町	4	江東区深川1
江川場（深川和倉町）		8	江東区深川1・2
裾櫓町（永代寺門前山本町）	氏子町	4	江東区門前仲町2
表櫓町（永代寺門前山本町）	氏子町	2	江東区門前仲町2
諸町	氏子町	1	江東区永代1
相川町	氏子町	8	江東区永代1
中嶋町	氏子町	10	江東区永代2
北川町	氏子町	12	江東区永代2
大嶋町	氏子町	2	江東区永代2
蛤町		9	江東区永代2、門前仲町1・2
黒江町	氏子町	1	江東区永代2、福住1、門前仲町1
一色町	氏子町	2	江東区福住1
材木町	氏子町	3	江東区福住2
佐賀町	氏子町	1	江東区佐賀1～2
中川町	氏子町	1	江東区佐賀2
永代町	氏子町	2	江東区佐賀2、福住2
上中佃町（深川佃町）		1	江東区牡丹3
佃町（深川佃町）		5	江東区牡丹3
古石場	氏子町	2	江東区古石場
新石場（定浚屋敷）	氏子町	1	江東区越中島1
立川		2	墨田区、江東区
両国		1	墨田区
本所相生町		3	墨田区両国2・3・4、緑1
弁天屋浦（本所弁天門前）	氏子町	1	墨田区千歳1
松井町（本所松井町）	氏子町	10	墨田区千歳2・3
岩井町（元岩井町）		6	千代田区東神田1、岩本町2
神田久右衛門町		4	千代田区東神田3
神田塗師町		3	千代田区鍛冶町1
西横町（神田鍋町西横町）		1	千代田区鍛冶町2、神田須田町1
大門通		48	中央区・千代田区
日本橋釘店		3	中央区
橋町四丁目		1	中央区東日本橋3
通塩町		1	中央区日本橋横山町
通油町		3	中央区日本橋大伝馬町
馬喰町		1	中央区日本橋馬喰町1・2
堀留		1	中央区日本橋本町2、堀留町1
室町		1	中央区日本橋室町1
品川町		1	中央区日本橋室町1
樽正町		1	中央区日本橋3
弓町		12	中央区銀座1・2
八官町		1	中央区銀座8
南茅場町		1	中央区日本橋茅場町1
亀嶋		1	中央区日本橋茅場町1～3
小網町三丁目		4	中央区日本橋小網町
小網町二丁目		2	中央区日本橋小網町、日本橋人形町1
箱崎	氏子町	2	中央区日本橋箱崎町
霊巌島（霊岸島）	氏子町	7	中央区新川1
柳橋		1	台東区柳橋1、中央区東日本橋2
四ッ谷伝馬町		1	新宿区四谷1～3
巴町（西久保巴町?）		1	（港区虎ノ門3?）
寺町		4	（不明）
新地		3	（不明）
下二丁目		4	（不明）
（判読不能につき町名不明）		14	（不明）

『鋳銭座遺跡考』にみえる亀戸銭座出土の遺物

江戸時代、寛永通宝を鋳造する銭座（鋳銭場）が亀戸に存在しました。場所は、現在の亀戸2丁目6番地（UR都市機構亀戸二丁目団地）に比定され、江東区の登録史跡（No.15）となっています。現在まで考古学的な調査は行われていませんが、明治期に銭座に関する遺物が出土しています。今回、この遺物について記述した資料をご紹介します。

亀戸銭座について

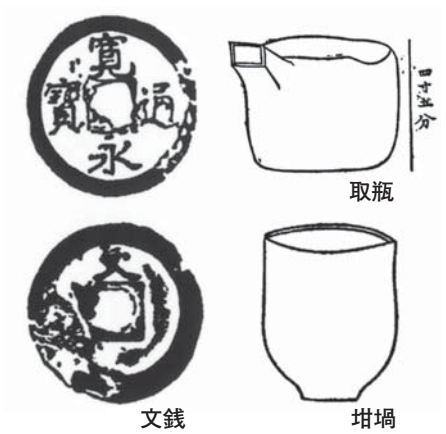
寛文8年（1668）、幕府は銭貨不足を解消するため、茶屋四郎次郎ら御用商人6名に命じ、亀戸天神社南の約一万五千坪の敷地を与え、寛永通宝を鋳造させます。寛文8年から天和3年（1683）の期間には、〝文銭〟と呼ばれる背面に「文」の字を鋳込んだ銅銭を鋳造しました。その後、7回にわたり鋳造が行われましたが、『新編武蔵風土記』『葛西志』に見えるように安永2年（1773）に廃止されたようです。

「本所猿江亀戸村辺絵図」にみる亀戸銭座
嘉永4年　近吾堂板（部分）

亀戸銭座跡モニュメント
※比定地外西側道路に設置されている。

『鋳銭座遺跡考』の出土内容

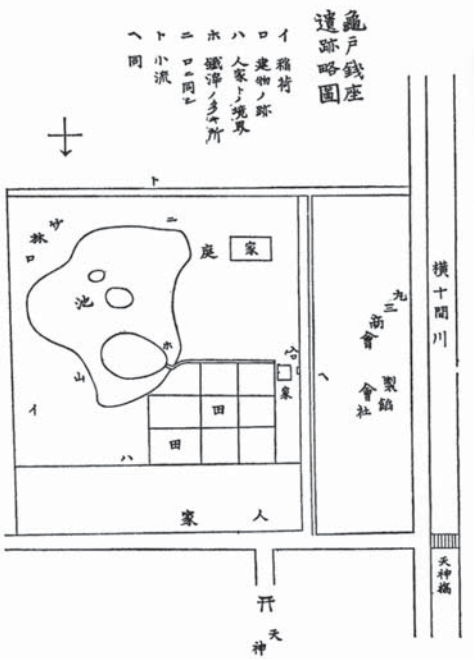
前述のように亀戸銭座のおおよその位置はわかるものの、亀戸銭座に関する江戸時代の文献や絵図等はほとんど確認できず、実態は不明と言わざるをえません。今回、ご紹介する『鋳銭座遺跡考』上編巻之一（精行社、1899年）は、中川近禮という人物が、明治30年（1897）から翌年にかけて7回にわたり、現地を実踏した成果をもとにした論考です。本書には比定地の平面図および著者や土地所有者等が採取した出土品について記述し、遺物の拓本やスケッチを掲載しています。判然としない部分もありますが、文章をもとに出土遺物の内訳を表としてまとめてみました。寛永通宝のほか、坩堝（るつぼ）や取瓶（とりべ）（鉄製柄杓）など銭の鋳造に関わる資料であることがわかります。現在これらの出土品の所在は不明ですが、考古学的調査がまだ行われていない現時点において、亀戸銭座を研究するうえでの貴重な資料といえるでしょう。



出土遺物
（『鋳銭座遺跡考』国立国会図書館蔵）

回	調査年月日	出土品
1	明治30年（1897）9月21日	磨銭砥3
2	明治31年（1898）4月17日	銭砥数十塊、鉄銭1
3	同年5月17日	銭砥、坩堝（夥しい量）
	同年5月27日	鉄製柄杓、土器3、焼塩壺ほか
4	同年6月 5日	鉄製柄杓（注口部）
5	?	銭砥
	?	白銅銭、鉄銭
6	?	文銭1
7	?	銅銭1
	?	坩堝2
	?	鉄銭1

出土遺物の内訳（『鋳銭座遺跡考』の記述を基に作成）



「亀戸銭座遺跡略図」
（『鋳銭座遺跡考』国立国会図書館蔵）

出版、1992年）に記述されています。本書には坩堝の写真が掲載され、これを見ると口縁がやや外反する形状が、『鋳銭座遺跡考』のスケッチと相似します。残念ながら、こちらの出土品も所在が不明です。

（文化財専門員　野本賢二）

追記　「亀戸二丁目団地」（昭和43年築）の建設の際に、寛永通宝および坩堝等が出土したことが、静岡いづみ会編『穴銭入門寛永通宝―新寛永銭の部』（書信館